2024年11月17日（日）主日朝礼拝説教

『現実を前にして』　井上隆晶牧師
エズラ書8章21～23節、マタイによる福音書4章1～11節

❶【エズラの祈り】

ペルシャのキュロス王の許可を受けて、エルサレムの神殿を再建するために祖国に帰ることになったエズラは川のほとりで一緒に旅をする民に断食を呼びかけ、祈りました。ペルシャからエルサレムまでの長い旅を、男だけで五千人、子どもや女性を合わせると1万五千人はいたでしょう。それらの民を敵から守らなければなりません。またペルシャの王様や貴族たちが神殿に献げるようにと預かった礼物を無事に届けなければなりません。盗賊はそれらを奪おうと襲ってくるでしょう。王様にペルシャの兵士や騎兵を同行させてくれるようにお願いすることもできます。神殿を再建することは王様のご命令なのですから、喜んで兵を貸してくれるでしょう。しかし聖書は「**わたしは旅の間敵から守ってもらうために、歩兵や騎兵を王に求める事を恥とした。**」（エズラ8：22）と書いています。
それは常日頃から、神様は御自分を信じてその名を呼ぶ者には必ず助けを遣わして下さると王様に言っていたからです。それなのに自分が言っている事と違うことをすれば「やっぱり口だけの人だ」と思われてしまいます。それを「**恥**」と思ったのです。ここにエズラの信仰が見えています。信仰の恥とは現実と妥協することです。そこでエズラは神を頼ろうと決断しました。でも不安があります。だからこそ断食して祈ったのです。**不安が出ないような信仰は、本当の信仰ではありません。不安が出てくるのはあなたが神に従う道を歩んでいる証拠です。誰でも神に従おうとする人は「不安」を覚えるのです。**

●榎本保郎牧師はこう書いています。「祈りを誤解している人がある。何でも自分の欲しい物を求める事が祈りであると考えている人がある。しかし祈りは信仰の行為である。み言葉を聞き、それに従おうとする時に出て来る叫びである。だから私たちに祈りが枯渇してきたとき、それは私たちの信仰の枯渇を意味する。なぜなら、私たちが神の助けを必要としていないとき、私たちは自分の力で生きているのであり、そこでは神のみ言葉への徹底的な聴従を欠いているからである。」

「忙しい人ほど、良く祈る」と云う言葉を聞いたことがあります。祈らなければ、神に助けてもらわなければ何も出来ないからです。寝ても起きても歩いていても、何をする時も「主よ、私を憐れみ下さい」と祈るのです。**信仰とは、どんな時も、神の助けを必要とすることです。**エズラとは「助け」という意味だそうです。

❷【イエス様が会われた誘惑】

マタイ4章1～11節にイエス様が会われた誘惑について書かれています。2節を

読むと「**さてイエスは悪魔から誘惑を受けるため、〝霊〟に導かれて荒れ野に行かれた。**」と書かれています。〝霊〟とは聖霊です。誘惑を与えるのは悪魔なのか神なのか、そのどちらもだと書かれているのです。神は悪魔が誘惑することをお許しになります。悪魔の誘惑も、神の御手の中、神の計画の中にあるということです。神はその悪の働きも用いて善を生みだすことがおできになるからです。**キリスト教は徹底的に一元論です。**しかしカルト宗教は二元論です。神と悪魔は対等であり、どちらかが勝つとこの世はその影響を受けると教えます。

「**そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。**」(2 節) とあります。この「**空腹**」というのを現実といいます。教会で神の言葉を聞いて信じても、一歩外に出れば現実が待っているのです。信仰してもお腹は減るし、お金は必要だし、病気は治らないし、問題はなくならないのです。これが現実です。この現実に直面すると「**誘惑する者が来る**」(4：3) のです。誘惑する者は言います。「教会の中の世界と、外の世界は違う。先生はこう言うけれど現実はそんなに甘くはない」。それを信じる人は「神は教会の中は支配されているけれど、教会の外では支配できない。教会の外の世界を支配しているのは、やっぱりプーチン、トランプ、周近平、金総書記だ。だから彼らと妥協し、彼らのご機嫌を取り、従わなければ生きていけない」といっているのと同じなのです。

●アメリカの大統領選挙が終わりました。民主党のハリスさんが負け、共和党のトランプさんが勝ちました。トランプさんは人種差別者です。それなのにアメリカのヒスパニック系の人は差別されてもトランプさんに票を入れました。なぜかというと物価高で生きていけないからです。差別されてでも生きている方が良いと判断したのです。現実の生活を前にしたら、みんな妥協するのです。現実と言うのは私たちの信仰をひっくり返し、破壊する力があります。

それらの現実に対してイエス様の対応の仕方がここに書かれています。最初の誘惑は「石をパンに変えろ」というものです。人間の科学的技術や知識で食べ物を手に入れ生きていこうとさせる誘惑です。イエス様は「**人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる**」(マタイ 4：4) と答えられました。人は神によって生きるのだと答えられたのです。あなたは自分の力で生きるか、神によって生きるかが問われています。
二番目の誘惑は、神を試すことです。試すというのは相手を自分の思いどおりにコントロール（支配）しようとする誘惑です。悪魔は聖書の言葉（詩編）も使いながら、自分を正当化させ、神を支配させようとさせます。

●あるシンナー依存の子が、シンナーをくれないと自殺すると言って、親を自分の思い通りにコントロールしようとしました。するとその母親は「どうぞ、自由にしてください。生きるか死ぬかは神様が決めておられることで私ではどうにもならないことなのです。」と答えました。子どもの言いなりにならなかったのです。

これを自立と言います。親が自立していないと、子どもも自立しようとしません。甘えれば生きていけるのですから。

人も神もコントロールしてはいけませんし、人からコントロールされてもいけません。人にコントロールされる人は、その人の支配を認めることになります。
三番目の誘惑は、この世を支配しているのは悪魔なのだから、悪と手を結べというものです。**結局は、主権は誰にあるのか、誰が世界を支配しているのか、あなたは誰を主人として生きているのかを問われているのです。神が世界を支配しています。私を支配できるのは神だけです。死も人も私を支配することはできません。「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」**（4：10）**これがすべての答えです。祈っていると心が澄んできて、神を主人とすることがすべてなんだという気持ちになり、その主人を信じる心が湧いてきます。祈りは人と神の関係を作り、人を一本筋の通った人に再創造します。**

●伊藤栄一牧師の体験談をお話しましょう。彼は山口県防府で牧師をしていた時、どうしても中国伝道をしたいという志を捨てられず、自費で中国に渡る決意をしました。当時の謝儀は30円で、50円手元にありました。出発の日教会に49円借金があることを思い出し、それを返したら1円しか残りませんでした。会計に事情を言ってお金を借りようか、弟や友人に借りようか悩んだそうです。会計さんの家に出かけようとして「待てよ、いつも自分は『何を食べようか、何を着ようかと思い煩うな。天の父はこれらのものがあなたがたに必要であることを御存じである。』と言ってきたではないか。これではやはり、人を頼っているだけではないか。なぜ神に祈らないのか。」そう思って祈り始めました。「今、1円しかありません。今さら出発を辞めるとも言えません。どうか必要なお金をください。」でもどうしても祈りに力がありません。そして気づきました。「自分はメンツだけを考えている。神が本当に自分を用いるなら、1円しかなくても祝福するだろう。求めるのは神の御心と栄光であって自分の対面ではない。1円で出発するのが神の御心なら、従います。御心に適わないなら出発を止めて下さい。」先生は次の日、1円を持って防府駅に行くと大勢の人が見送りに来ており 13 人の人から餞別をもらい、門司で友人たちから餞別をもらい、九州で 2 人の友人に餞別をもらい、開けてみると30円、15円、4円で合わせて49円だったというのです。先生はぴしりと鞭で打たれるような厳粛な驚きを感じ、泣いたというのです。それは、神は本当に生きておられるという、神からの呼びかけと励ましでした。

（『天の梯子』三浦綾子著から）

神を神とすること、主に本当に仕えるということ、つまり十戒の第一の戒めを守ることは何と難しい事でしょう。神を神と出来ない罪をお許しください。一生かかってでも、少しでもこの戒めを守り、その戒めに近づけるように祈りたいと思いますし、そのように生きて行きたいと思います。